

学生用アサーション行動尺度の作成に関する研究

—PF-Study による妥当性検討の試み—

A study of constructing a scale of Assertion behavior for a university student

—Validation research by PF-study—

文学研究科教育学専攻博士前期課程修了

蔭 山 順 一

Junichi Kageyama

I. 問題

1. アサーションについて

(1)アサーションの歴史

アサーション (Assertion) とは「自分の権利のために立ち上がり、同時に相手の権利も考慮する自己表現」(平木、1993)である。アサーションの起源はアメリカで、その考え方や技法は1950年代に行動療法の中で発明された。当初は対人関係がうまくいかない人や、自己表現が不得手で社会的な場面が苦手な人のためのカウンセリングとして実施されたのが始めとされている。しかし、アサーションが多く知られるようになったのは、1960年代から70年代にかけてアメリカで起きた基本的人権をめぐる社会的・文化的変革の動きが大きい。その中でも、「人権拡張」・「差別撤廃」の運動が深く関係しており、60年代の公民権法を中心に始まった人種差別撤廃運動からキング牧師暗殺の影響を受け、アサーション運動へと展開した。また、国際婦人年(1975年)を契機に性差別に対するウーマン・リブ運動が世界的に動き出し、女性の地位向上、機会均等の確保に向けて展開し始めた。またこのような人権に対する再認識・再確認の動きの中で、それまで言動を弾圧され、差別を受けてきた人々にも言動の範囲が拡大されていった。このとき同時に、平等とはどういうことをいうのか、人権とは何を意味しているのか、などを見直す必要があり、それに応える形となったのがアサーション・トレーニングであった。そこから、アサーションはうまくいかない自己表現や対人関係のための個人的な治療法としてだけでなく、人間の価値や平等に対する考え方として、また差別などの人権問題に関わる時の有効な対応法としても認識されている。

(2)アサーション権

アサーションの拠りどころは、自己表現の権利という基本的人権を認めることにある(平木、1993)。よって、アサーションは誰もが持っているアサーションの権利、すなわち「アサーション権」を認めることから始まる。アサーションに関する権利は数多く存在するた

め、ここでは平木（1993）で挙げられた 5 つのアサーション権について以下に述べる。

①「私たちは、誰からも尊重され、大切にしてもらう権利がある」

人権の基本ともいうべきもので、つまり、人間の尊厳は誰からも侵されることはないことを意味する。人間が尊重されることは、人間の気持ちや、考え、意見、価値観も尊重されるということになり、誰でも欲求をもってよく、さらに自分の希望を述べ、他者に依頼してよく、また、自分の意見を持ち、それを表現してもよい。

②「私たちは誰もが、他人の期待に応えるかどうかなど、自分の行動を決め、それを表現し、その結果についても責任をもつ権利がある」

自分自身について最終的判断権をもっていることをいう。自分がどんなふうに関じ、どう考え、どんな行動をとるかについて決めたり、判断したりしてよいのであり、その結果について、責任をとることができる。したがって、逆に、他者も自分の行動を決める権利を持っているため、他人を自分の思うとおりに変えることはできない。

③「私たちは誰でも過ちをし、それに責任をもつ権利がある」

この人権は「人間である権利」とも言われ、人間は完璧ではありえないので、失敗をする存在であり、また失敗をしていい存在でもある。そしてその失敗、その結果には責任を取ることができる。失敗して責任を取るとは、できる限りその結果を引き受ければよいのであり、完璧でない人間の取れる責任も限られている。そのため、人間として失敗したことに対して責任を引き受けるということは、一般に考えられている義務なのではなく、むしろ権利と見なされる。

④「私たちには、支払いに見合ったものを得る権利がある」

買い物をしたり、サービスを受けたりする時など、支払いに見合ったことを要求してもよいということ。自分の支払いに見合ったもの、働きを相手に要求してもよいが、相手にも失敗する権利がある。その権利を認めるならば、相手を尊重したアサーティブな要求が大切となる。

⑤「私たちには、自己主張しない権利もある」

「アサーションしてもよい」は「アサーションしなくてはいけない」ではなく、アサーティブにしないことも選べるという意味である。例えば、アサーションすると却って危険であるときとか、時間やエネルギーに見合わないときなど、「アサーションしないこと」をアサーティブに選んでもよい。つまり、アサーションするときも、しない時も、相互尊重の精神の下で自分の責任で選べばよいし、その結果も引き受ければよい。

(3)アサーションのタイプ

平木（1993）はアサーションのタイプを Aggressive（以下 AG）、Non - assertive（以下 NA）、Assertive（AS）の3つに分けている。AG は、自分の意見や考え、気持をはっきり言うことで、一見、自分の言論の自由を守り、自分の人権のために自ら立ち上がって、自己主張するようにも見えるが、相手の言い分や気持ちを無視、又は軽視して結果的に相手に自分の言い分を押し付ける言動をいう。NA は、自分の気持ちや考え、信念を表現しなかったり、しそこなったりすることで、自分から自分の言論の自由を踏みにじっているような言動をいう。AS は自分も相手も大切にしたい自己表現をいう。

2. アサーション研究について

(1)アサーション尺度研究の現状と問題点

日本におけるアサーションに関する研究は大きくアサーション尺度の研究とアサーション・トレーニングの研究に大別される。まずアサーション尺度に関する研究については現在までに多くのアサーション尺度が作成されている。児童版では古市（1993、1995）の Personal Relations Inventory (PRI) や濱口（1994）の児童用主張性尺度、青年期以降のものでは伊藤（2001）の Assertive Mind Scale (AMS) や玉瀬ら（2001）の青年用アサーション尺度、村瀬（1989、1991）などが挙げられる。用松・坂中（2004）はアサーションの構成概念について一次元と多次元という視点から論じており、一次元の場合、主張性を一次元として捉えることにより個人の全般的な自己表現行動のあり方を把握することができる特徴をあげている。そして多次元の場合は、個人の自己表現のうち、得意な部分や不得意な部分をより細かく複雑に捉える事ができる特徴をあげ、多次元の方がより細かく捉えることができ、トレーニングプログラムにも示唆を与えることを述べている。さらに用松・坂中（2004）は尺度作成の試みは多いが信頼性や妥当性についての検討が不十分であるということ、一次元か多次元かということを含めたアサーションの構成概念の検討の必要性を指摘している。

(2)アサーション・トレーニング研究の現状と問題点

次にアサーション・トレーニング（以下 AT と略）について概観する。AT に関する効果研究はいくつか報告がある。伊藤（2001）は、日本におけるアサーション像の探索的研究において、AT 参加者のトレーニング前後の変化について参加者の自己報告と個別面接を考慮しながら記述し、AT の日常への影響を、人物像・行動面・家族関係の3つの視点からまとめている。また用松・坂中（2004）によれば、金（2002）は韓国において小学生を対象にトレーニングを実施し、認知的アプローチと行動的アプローチではどちらが高い効果が得られるかを検討している。そして研究としては発表されていないものの、書籍としていくつかの事例報告がなされている（平木、1989；平木ら、2002；菅沼・牧田、2004；園田、2008）。現在、AT 自体は急速に普及し盛んに行われているが、研究レベルでの報告が少な

く、実践面が先行し、研究面が遅れていることや適切なアサーション尺度がまだ存在していないことなどが指摘されている（用松・坂中、2004；沢崎、2006）。

Ⅱ．本研究の目的

日本におけるアサーション研究は、信頼性・妥当性のあるアサーション尺度の研究、ならびに AT の効果研究において、まだまだ不十分であると言える。このため、AT を前提としたアサーション尺度で、さらに信頼性・妥当性を十分に備えた尺度を作成することは意義があると考えられる。またアサーション尺度作成に関し、多次元の方がより細かく捉えることができ、AT にも応用しやすいことから、本研究では多次元により構成されたアサーション尺度を作成すること、さらに信頼性や妥当性についても、量的検討だけでなく質的検討もすることで尺度の妥当性を確かめることを目的とする。なお、多次元の構成に関して、平木（1993）がアサーションを AS・NA・AG の 3 つの行動に分類していることに鑑み、その 3 つの行動から構成されたアサーション尺度を作成することとした。それにより、多次元によるアサーション測定ができ、AT にも応用可能であろうと考えたからである。

Ⅲ．第 1 研究

1. 目的（予備調査）

第 1 研究では、多次元により構成された学生用アサーション行動尺度(以下アサーション尺度)を作成し、信頼性や妥当性を検討することを目的とする。

2. 方法

(1)アサーション尺度作成

多次元により構成されたアサーション尺度を作成するため、同じく青年を対象とした玉瀬（2001）を元に、AS・NA・AG の項目を作成した。その際、濱口（1994）の 6 つの心理要因（権利の防衛・要求の拒絶・異なる意見の表明・個人的限界の表明・援助の要請・他者に対する肯定的な感情と思考の表明）も考慮しながら、独自項目も作成するなど、26 場面×3 因子（AS・NA・AG）の 76 項目をアサーション熟練者と心理学を専攻する大学院生 2 名とともに作成した（表 1）。このアサーション尺度が第 1 段階となる。

(2) 調査日

2007 年 7 月上旬から中旬にかけて実施

(3) 調査対象

都内にある私立大学の大学生 247 名（男子 101 名、女子 146 名）を対象とした。平均年齢 20.28 歳（19 歳～29 歳）、標準偏差 1.229 であった。

表1 予備調査で使用したアサーション尺度の各項目

	AS項目	NA項目	AG項目
1	友達に頼みごとをしたいときは率直に言う	友達に頼みごとをしたくても、なかなか言えない	友達に頼みごとをするときは無理やりお願いする
2	親に反対されそうなことでも必要なら親に言う	親に反対されそうとき、そのまま何も言わず親の意見に従ってしまう	親に反対されそうなことは無視して一方的に行う
3	自分だけではできそうにないことが起きた時、友達に手伝ってくれるよう求める	自分だけではできそうにないことが起きた時、友達に手伝いを求めたくても言えない	自分だけではできそうになことが起きた時、友達に強制的に手伝わせる
4	好きな人には率直に愛情や好意を示す	好きな人に愛情や好意を伝えたくてもなかなか伝えられない	好きな人に好意を伝えるとき、いじわるになったりいやみになったりする
5	勉強している時に騒いでいる人がいたら静かにするように言う	勉強している時に隣で騒いでいる人がいても何も言わない	勉強している時に隣で騒いでいる人がいたら「うるさい！」と怒る
6	友達の意見に賛成の時、賛成だという思いを伝える	友達の意見に賛成の時、賛成だという思いをなかなか伝えられない	友達の意見に賛成でも、素直に言わない
7	友達のいいところを見つけたら素直に褒める	友達のいいところを見つけても、褒めることができない	友達のいいところを見つけても、「大したことない」と否定する
8	貸していたお金を友達が返してくれない時は催促する	貸していたお金を友達が返してくれない時、返してほしいことをなかなか言えない	貸していたお金を友達が返してくれない時、「返せ！（返して！）」と強く要求する
9	遊びに誘われても行けない時、ちゃんと断ることができる	遊びに誘われても行けない時、結局断れずに付き合ってしまう	遊びに誘われても行けない時、無視してやり過ごす
10	大事な話の途中で口を挟まれたら、話が終わるまで待つてくれるように言う	大事な話の途中で口を挟まれたら、自分の話をすることができず相手の話を聞いてしまう	大事な話の途中で口を挟まれたら、「ちょっとだまれ！（だまって！）」と怒る
11	友達の都合を一方的に押し付けられた時は断る	友達の都合を一方的に押し付けられても断ることができない	友達の都合を一方的に押し付けられたら、いやだと強く言い返す
12	先生の話が聞こえなかった時、もう一度話して欲しいと依頼する	先生の話が聞こえなかった時、聞き直したくてもそのまま流してしまう	先生の話が聞こえなかった時、「聞こえません！」と強く言う
13	少人数の話し合いの場で進んで意見を言う	少人数の話し合いの場で、自分の意見をなかなか言えない	少人数の話し合いの中で自分の意見を無理やり押し通す
14	先生から腹の立つことを言われたら、なぜかと尋ねる	先生から腹の立つようなことを言われても黙っている	先生から腹の立つようなことを言われたら、「うるさいです！」と強く言う
15	親に援助を求めたい時、丁寧にお願いできる	親に援助を求めたくてもなかなか言えない	親に援助を求めたい時、一方的に要求する
16	好意を持った相手には自分から話しかける	援助を持った相手に自分から話しかけることができない	好意を持った相手には強引に誘う
17	図々しく不正な人がいたら、その人に注意する	図々しく不正な人がいても、なかなか注意できない	図々しく不正な人がいたら、「やめろ！（やめなさいよ！）」と怒鳴る
18	先輩に対して、できないものは「できません」と言う	先輩に対して、できないものでも「できません」と言えない	先輩に対して、できないものは「できない（できません！）」と怒る
19	他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする	他人から誤解されても、そのまま弁解せずやり過ごしてしまう	他人から誤解されたら、相手を罵り非難する
20	自分ができそうにないことを頼まれたとき、きちんと断ることができる	自分ができそうにないことを頼まれても、仕方なく引き受けてしまう	自分ができそうにないことを頼まれると、「お前がやれ！（そっちがやったら！）」と怒る
21	先生が黒板に間違っって書いた時、そのことを伝える	先生が黒板に間違っって書いたとき、そのことを伝えることができない	先生が黒板に間違っって書いたとき、「間違っってる（違います！）」と非難する
22	自分に分からないことがあれば、説明を求める	自分にわからないことがあっても、なかなか人に説明を求められない	自分に分からないことがあると、相手の説明が悪いと文句を言う
23	忙しいのに家族から何か頼まれた時、きちんとことわることができる	忙しいのに家族から何かを頼まれた時、断れずに引き受ける	忙しいのに家族から何か頼まれた時、「できない」と一方的に拒否する
24	先輩からの不当な要求を断ることができる	先輩からの不当な要求を断ることができない	先輩からの不当な要求に対し強く言い返す
25	買った商品に欠陥があったら交換してもらおう	買った商品に欠陥があっても、交換して欲しいとは言えない	買った商品に欠陥があったら、交換するよう文句を言って起る
26	話し合いの中で自分の思っていることは食い違う意見が出た時、自分の意見をちゃんと伝える	話し合いの中で自分の思っていることは食い違う意見が出ると、自分の意見を抑えて相手に従う	話し合いの中で自分の思っていることは食い違う意見が出た時、その意見を否定する

(4) 調査方法

大学の授業時間の一部を利用し、集団調査を行った。調査時間は約 20 分であった。使用尺度は以下の 2 種類である。

- ① アサーション尺度（第一段階）76 項目
- ② 自尊感情尺度（山本ら、1982）10 項目

自尊感情とアサーションに関して園田（2002）は、アサーションが自尊感情や自己信頼の賦活・育成にも関係があることを述べていること、また本尺度の項目数の少ないことも考慮し、アサーションとの妥当性を見るために用いた。

3. 結果

(1) 尺度の分析

アサーション尺度（第一段階）について因子分析をするためにまずすべての項目に天井効果、フロア効果を確認したがいずれも見られなかったため、全ての項目を使用した。項目作成の段階で 3 因子の構造を仮説としているため、3 因子指定、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。そして、共通性や負荷量（.35 以上）を基準に分析した結果、AS6 項目、NA5 項目、AG12 項目のアサーション尺度（第二段階）が作成された（表 2）。信頼性はそれぞれ $\alpha = .740$ 、.752、.850 と高い内的整合性を確認することができた。

また、自尊感情尺度に関して主成分分析を行った結果、一元性を確認することができた（表 3）。

(2) アサーション尺度と自尊感情の関係

アサーション尺度（第二段階）と自尊感情の関係をみるため、それぞれの因子項目得点を合計したものを AS 得点、NA 得点、AG 得点、自尊感情得点（逆転項目は数値を反転させて得点化）とした。アサーション得点は、半田（2007）を参考に $AS \text{ 得点} - (NA \text{ 得点} + AG \text{ 得点})$ とした（表 4）。そしてアサーション得点と各下位尺度得点と自尊感情得点との関係をみるために相関分析を行った（表 5）。その結果、AS 得点と自尊感情得点との間に低い正の相関、NA 得点と自尊感情得点との間に負の相関がみられ、アサーション得点・AG 得点と自尊感情得点との間の関係は無相関だった。このことから数値は低いものの、アサーション尺度（第二段階）のある程度の構成概念妥当性を確認することができた。しかし、多次元のほうがよりアサーションを捉えることができるということは十二分には証明されなかった。

4. 目的（本調査）

予備調査である程度の妥当性をもったアサーション尺度を作成することはできたが、各因子の項目数のバランスの悪さや妥当性に関する検討が不十分であるため、新たに項目数を増やし、さらに妥当性の検討をすることを目的とした。

表2 学生用アサーション行動尺度の因子分析結果

質問項目	抽出因子				共通性
	I	II	III		
I. アグレッシブ($\alpha =.850$)					
自分にできそうにないことを頼まれると、「お前がやれ！（そっちがやったら！）」と怒る	0.753	-0.130	-0.066	0.541	
他人から誤解されたら、相手を罵り非難する	0.677	-0.214	0.035	0.401	
大事な話の途中で口を挟まれたら、「ちょっとだまれ！（だまって！）」と怒る	0.620	0.032	0.067	0.382	
勉強している時に隣で騒いでいる人がいたら「うるさい！」と怒る	0.591	0.311	0.019	0.561	
貸していたお金を友達が返してくれない時、「返せ！（返して！）」と強く要求する	0.587	0.069	-0.060	0.399	
自分に分からないことがあると、相手の説明が悪いと文句を言う	0.564	-0.331	0.024	0.301	
少人数の話し合いの中で自分の意見を無理やり押し通す	0.530	-0.004	0.116	0.264	
図々しく不正な人がいたら、「やめろ！（やめなさいよ！）」と怒鳴る	0.529	0.223	-0.041	0.426	
話し合いの中で自分の思っていることとは食い違う意見が出た時、その意見を否定する	0.525	-0.048	-0.050	0.274	
友達に頼みごとをするときは無理やりお願いする	0.522	-0.133	0.031	0.239	
買った商品に欠陥があったら、交換するよう文句を言って起る	0.496	0.118	0.030	0.290	
先生から腹の立つようなことを言われたら、「うるさいです！」と強く言う	0.386	0.298	-0.027	0.326	
II. アサーティブ($\alpha =.740$)					
先生が黒板に間違えて書いた時、そのことを伝える	-0.174	0.718	0.099	0.438	
先生の話しが聞こえなかった時、もう一度話して欲しいと依頼する	-0.110	0.691	0.093	0.413	
図々しく不正な人がいたら、その人に注意する。	0.186	0.549	0.018	0.397	
勉強している時に騒いでいる人がいたら静かにするように言う	0.179	0.542	-0.044	0.411	
他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする	-0.285	0.475	0.026	0.212	
先生から腹の立つことを言われたら、なぜかと尋ねる	0.110	0.473	-0.194	0.373	
III. ノンアサーティブ($\alpha =.752$)					
先輩に対して、できないものでも「できません」と言えない	0.183	-0.044	0.829	0.666	
先輩からの不当な要求を断ることができない	0.067	0.021	0.712	0.482	
友だちの都合を一方的に押し付けられても断ることができない。	-0.158	0.035	0.631	0.455	
自分ができそうにもないことを頼まれても、仕方なく引き受けてしまう	-0.054	0.060	0.520	0.270	
遊びに誘われて行けない時、結局断れずに付き合ってしまう	0.034	0.076	0.454	0.187	
因子相関行列					
因子	I	II	III		
		0.337	-0.240		
	II		-0.298		
因子寄与率	21.015	9.586	7.268		
累積寄与率	21.015	30.601	37.868		

表3 自尊感情尺度の主成分分析結果

質問項目	抽出因子	
	I	共通性
自分に対して肯定的である	0.796	0.635
自分に自信がある	0.795	0.671
何かにつけて自分は役に立たない人間である*	0.776	0.729
少なくとも人並みには価値のある人間である	0.764	0.695
いろいろな良い資質を持っている	0.758	0.728
自分が全くだめな人間だと思えることがよくある*	0.696	0.787
だいたいにおいて自分に満足している	0.671	0.453
敗北者だと思えることがよくある*	0.661	0.725
自分には自慢できるところがあまりない*	0.658	0.436
物事を人並みにうまくやれる	0.562	0.459
寄与率		51.468

*は逆転項目

表4 アサーション得点並びに下位尺度得点、自尊感情得点の平均、標準偏差

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
AS得点	247	7	23	14.729	2.671
NA得点	247	5	19	11.146	2.438
AG得点	247	12	44	21.773	4.839
アサーション得点	247	-39	-3	-18.190	5.272
自尊感情得点	247	10	39	25.854	5.263

表5 自尊感情得点とアサーション得点並びにアサーション下位尺度得点との相関分析結果

	AS得点	NA得点	AG得点	アサーション尺度得点
自尊感情得点	0.298 **	-0.323 **	0.154 *	0.159 *

* $p < .05$ ** $p < .01$

(1)アサーション尺度項目の追加

予備調査で作成されたアサーション尺度項目（第二段階）に加え、新たに 23 項目を追加し計 46 項目のアサーション尺度（第三段階）を作成した。今回についても予備調査で行ったのと同様の手続きで行った。

(2)調査日

2007 年 12 月中旬から 2008 年 1 月下旬にかけて行った。

(3)調査対象

都内にある私立大学の大学生、計 216 名、うち有効回答 190 名（男子 53 名、女子 137 名）を対象とした。平均年齢 20.45 歳（18 歳～24 歳）、標準偏差 1.067 であった。

(4)調査方法

大学の授業の一部を使った集団調査と個別回収方式により実施した。調査時間はおよそ 20 分であった。使用尺度は以下の 3 種類である。

①アサーション尺度（第三段階）46 項目

②アサーション・マインド・スケール（以下 AMS）（伊藤、1998）20 項目

アサーション尺度の併用的妥当性を検討するために用いた。ちなみに、AMS の信頼性、妥当性は共に確認されている。

③ 発言抑制に関する尺度（以下発言抑制尺度）（畑中、2003）41 項目

アサーション尺度の構成概念妥当性を検討するために用いた。この尺度は複数の尺度から構成され、相手志向尺度（8 項目）、自分志向尺度（6 項目）、関係距離確保尺度（7 項目）、規範・状況尺度（12 項目）、スキル不足尺度（8 項目）からなる。また信頼性も確認されている。

5. 結果

アサーション尺度の因子分析をするため各項目に天井効果、フロア効果を確認したが見られなかったため、全ての項目を使用した。項目作成の段階で 3 因子の構造を仮設しているため、3 因子指定、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。共通性、負荷量（.30 以上）を基準に分析した結果、AS8 項目（「他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする」「先生の話が聞こえなかった時、もう一度話してほしいと依頼する」など）、NA11 項目（「先輩からの不当な要求を断ることができない」「友達の都合を一方的に押し付けられても断ることができない」など）、AG16 項目（「自分にできそうにないことを頼まれると、『お前がやれ！（そっちやたら！）』と怒る」など）のアサーション尺度（第四段階）35 項目となった（表 6）。信頼性はそれぞれ $\alpha = .711$ 、 $.844$ 、 $.858$ と内的整合性を確認することができた。

AMS 項目に関して天井効果、フロア効果を確認したところ、6 項目（「相手の話したい気持ちを促すためにも積極的に耳を傾けることを大事にしている」「会話では「きく」役割も大切にしている」など）に天井効果を確認したため削除して分析をした。今回 AMS は併存的妥当性を確認するための AMS 得点として使用するため、因子分析をせずに残りの 14 項目得点を合計して使用した。また信頼性係数は $\alpha = .659$ であった。

表6 学生用アサーション行動尺度の因子分析結果

質問項目	抽出因子			
	I	II	III	共通性
I. アグレッシブ($\alpha = .858$)				
43自分にできそうにないことを頼まれると、「お前がやれ！（そっちがやったら！）」と怒る。	0.648	-0.082	-0.120	0.397
39他人から誤解されたら、相手をのしり非難する。	0.630	-0.001	-0.416	0.395
36大事な話の途中で口を挟まれたら、「ちょっとだまれ！（だまって！）」と怒る。	0.611	-0.166	-0.059	0.402
26少人数の話し合いの場で自分の意見を無理やり押し通す。	0.606	-0.048	0.051	0.403
40勉強している時に隣で騒いでいる人がいたら「うるさい！」と怒る。	0.595	-0.087	0.036	0.393
17友だちに頼みごとをするときは、無理やりお願いする。	0.595	0.130	0.054	0.369
20自分に分からないことがあると、相手の説明が悪いと文句を言う。	0.562	0.069	-0.105	0.287
4人の意見や主張は二の次で大事ななのは自分の意見だけである。	0.498	0.099	0.069	0.267
27話し合いの中で自分の思っていることは食い違う意見が出た時、その意見を否定する。	0.494	-0.112	-0.033	0.260
23買った商品に欠陥があったら、交換するよう文句を言って怒る。	0.474	0.146	0.354	0.431
13友達のいいところを見つけても、特に評価をしない。	0.466	0.090	-0.206	0.204
34貸していたお金を友だちが返してくれない時、「返せ！（返して！）」と強く要求する。	0.442	-0.128	0.185	0.332
16先生から腹の立つようなことを言われたら、「うるさいです！」と強く言う。	0.440	-0.100	0.191	0.320
10好意を持ったらとにかく相手の気持ちよりも自分の気持ちを優先させる。	0.439	0.293	0.276	0.347
31図々しく不正な人がいたら、「やめろ！（やめなさいよ！）」と怒鳴る。	0.405	-0.260	0.010	0.265
12自分だけではできそうにないことが起きた時、友達に無理やり手伝わせる。	0.404	-0.044	0.082	0.202
II. ノンアサーティブ($\alpha = .844$)				
22先輩からの不当な要求を断ることができない。	0.064	0.752	0.074	0.528
32友だちの都合を一方向的に押し付けられても断ることができない。	-0.082	0.731	0.032	0.541
29遊びに誘われて行けない時、結局断れず付き合ってしまう。	-0.082	0.665	0.175	0.409
19先輩に対して、できないものでも「できません」と言えない。	0.044	0.655	-0.005	0.426
24自分ができそうもないことを頼まれても、仕方なく引き受けてしまう。	-0.063	0.604	0.014	0.374
42大事な話の途中で口をはさまれると、そのまま口ごもってしまう。	-0.086	0.552	-0.110	0.383
5店員に熱心に勧められると、ついつい買ってしまう	-0.038	0.549	0.044	0.294
41親に反対されると、何も言えずに親の意見に従ってしまう。	0.030	0.508	-0.016	0.260
38友達に頼みがあってもなかなか言えない。	-0.098	0.445	-0.311	0.428
6友達の意見に賛成の時、賛成ということをなかなか伝えられない。	0.298	0.387	-0.059	0.214
11貸したお金が返ってこない時、返して欲しいことをなかなか言えない。	-0.027	0.354	-0.246	0.250
III. アサーティブ($\alpha = .711$)				
46他人から誤解されたら、誤解が解けるように話をする。	-0.153	-0.090	0.645	0.415
14先生の話が聞こえなかった時、もう一度話して欲しいと依頼する。	0.122	0.153	0.576	0.355
30好きな人には素直に好意を表す。	0.036	0.024	0.550	0.309
28好意を持った相手には自分から話しかけたりする。	-0.053	-0.042	0.497	0.247
1友達にちょっと何かを頼んだり、助言を求めたりできる。	-0.157	-0.249	0.486	0.340
44先生が黒板に間違って書いた時、そのことを伝える。	0.163	0.060	0.475	0.286
33友達達が自分の知らないことを話している時、教えてくれるように言う。	0.008	0.007	0.383	0.147
45買った商品に欠陥があったら、そのことを丁寧に伝え交換してもらう。	-0.069	0.054	0.314	0.082
因子相関行列				
因子	I	II	III	
		-0.136	0.335	
			-0.327	
因子寄与率	17.223	10.455	5.355	
累積寄与率	17.223	27.678	33.033	

発言抑制尺度を因子分析するために各項目に天井効果、フロア効果を確認したところ、1項目（「深くかわりたくない人に対しても、話をする」）に天井効果を確認したため削除して分析した。先行研究に倣い、各尺度項目に対して主成分分析を行い、第1主成分への負荷量が.40以上になるよう項目を選定した後、信頼性係数を算出した（表7）。相手志向尺度は「相手を傷つけてでも言いたいことは言う」「相手を傷つけるようなことを言うことがある」など6項目、自分志向尺度は「拒否されるかもしれないという思いから、発言を控えることがある」「嫌がられるかもしれないという思いから、発言を控えることがある」など6項目、関係距離確保尺度は「相手との距離を置くために、発言を控えることがある」など5項目、規範・状況尺度は「場を乱すような発言は差し控える」「周囲の状況にそぐわない発言は控える」など6項目、スキル不足尺度は「言いたいことをうまく言えないことがある」「伝えたいことを上手に言葉にできないことがある」など7項目となった。信頼性係数はそれぞれ、.793、.773、.691、.807、.881となった。

次に妥当性を検討するために、アサーション尺度とAMS、並びに発言抑制尺度との相関分析を行った。得点は因子毎の項目得点を合計したものを得点とした（表8）。その結果、アサーション尺度とAMSについて、AS得点、アサーション得点に有意な正の相関、NA得点とAG得点に有意な負の相関があった（表9）。アサーション尺度と発言抑制尺度について、AS得点は自分志向得点、関係距離確保得点、スキル不足得点に有意な負の相関があった。NA得点は相手志向得点に有意な負の相関、自分志向得点、関係距離確保得点、スキル不足得点に有意な正の相関があった。AG得点は相手志向得点に有意な正の相関、自分志向得点、規範状況得点、スキル不足得点に有意な負の相関があった。アサーション得点は相手志向得点、自分志向得点、関係距離確保得点、スキル不足得点に有意な負の相関、規範状況得点に有意な正の相関があった（表10）。

表7 発言抑制に関する尺度の主成分分析の結果

<u>相手志向尺度 ($\alpha = .793$)</u>	I	共通性
5相手を傷つけてでも言いたいことは言う	0.805	0.648
4相手を傷つけるようなことを言うことがある	0.763	0.582
2たとえ相手がかawaiiそうだと思っても、言いたいことは言う	0.728	0.530
3相手の気分を害するような話をする	0.701	0.491
1直接聞き手を非難することがある	0.648	0.420
17相手を不快にしないために、発言を控えることがある	-0.535	0.287
累積寄与率	49.312	
<u>自分志向尺度 ($\alpha = .773$)</u>	I	共通性
37拒否されるかもしれないという思いから、発言を控えることがある	0.864	0.747
38嫌がられるかもしれないという思いから、発言を控えることがある	0.791	0.626
7自分の発言を否定されるのが怖くて、発言を控えることがある	0.732	0.536
36見くびられないために、発言を控えることがある	0.597	0.357
14人からけなされそうな発言を控えることがある	0.586	0.343
6たとえ自分の評価が悪くなろうとも、言いたいことは言う	-0.518	0.268
累積寄与率	47.954	

関係距離確保尺度($\alpha = .691$)	I	共通性
15相手と距離をおくために、発言を控えることがある	0.756	0.572
40あまりかかわりたくない人の発言に、反論の余地があっても放っておく	0.694	0.482
41これ以上親しくなりたくない人には、言おうとした発言も控える	0.688	0.474
34込み合った話を避けるために、発言を控えることがある	0.641	0.411
10自分に深入りしてほしくないときは話す量が減る	0.553	0.306
累積寄与率	44.879	
規範・状況尺度($\alpha = .807$)	I	共通性
21場を乱すような発言は差し控える	0.868	0.754
22周囲の状況にそぐわない発言は控える	0.845	0.715
20場の雰囲気 considering 発言を控えることがある	0.773	0.597
19その場の雰囲気が悪くなるような発言は控える	0.766	0.587
27常識から外れている発言は差し控える	0.690	0.477
31その場の雰囲気を壊すようなことも、平気で口にする	-0.570	0.325
累積寄与率	57.562	
スキル不足尺度($\alpha = .881$)	I	共通性
29言いたいことをうまく言えないことがある	0.839	0.705
28伝えたいことを上手に言葉にできないことがある	0.819	0.671
12人と話すのが下手だと感じる	0.775	0.601
24言いたいことを確実に相手に伝えることができる	-0.762	0.581
11自分の気持ちをはっきり伝えられないことがある	0.741	0.548
23自信をもって話をするすることができる	-0.724	0.524
25会話をうまく続けていけないことがある	0.721	0.520
累積寄与率	59.298	

表8 アサーション尺度並びにアサーション下位尺度、AMS得点、発言抑制各尺度得点の平均、標準偏差

	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
AS得点	190	11	32	22.874	3.633
NA得点	190	12	43	24.026	5.703
AG得点	190	17	56	29.358	6.799
アサーション得点	190	-51	-8	-30.511	8.648
AMS得点	190	28	54	40.479	4.763
相手志向得点	190	6	27	14.363	4.498
自分志向得点	190	7	29	19.247	4.682
関係距離確保得点	190	7	25	17.437	3.501
規範状況得点	190	12	35	26.584	4.358
スキル不足得点	190	7	35	23.474	5.832

表9 アサーション得点、並びにCAS下位尺度得点とAMS得点の相関分析結果

	AS得点	NA得点	AG得点	アサーション得点
AMS得点	0.273 **	-0.354 **	-0.210 **	0.513 **

** p<. 01

表10 アサーション得点、並びにCAS下位尺度得点と発言抑制に関する尺度の相関分析結果

	相手志向得点	自分志向得点	関係距離確保得点	規範状況得点	スキル不足得点
AS得点	0.105	-0.288 **	-0.167 *	-0.044	-0.456 **
NA得点	-0.243 **	0.456 **	0.310 **	0.059	0.438 **
AG得点	0.546 **	-0.260 **	-0.104	-0.310 **	-0.273 **
アサーション得点	-0.225 **	-0.218 **	-0.193 **	0.186 *	-0.266 **

** p<. 01 * p<. 05

6. 考察

第 1 研究の目的は、アサーション尺度を作成し、その妥当性を確認することであった。まず、アサーション尺度作成に関して AS8 項目、NA11 項目、AG16 項目と予備調査に比べて各因子項目のバランスを改善することができた。信頼性係数もいずれも.7 以上の高い信頼性を確認することができた。また妥当性に関して、アサーション尺度下位尺度得点と AMS の相関はいずれも低い相関であるが、アサーション得点と AMS の相関は中程度の相関があった。このことから、一次元によるアサーション測定よりも多次元によるアサーション測定のほうがより包括的なアサーションを測定することを確認することができた。これは、先行研究の結果と一致するものとなった。

アサーション尺度の下位尺度に関して、AS 得点はスキル不足得点と中程度の負の相関となった。AS が高い者は適切な方法で自己表現できると考えられており、コミュニケーションスキルも高いと考えられる。つまり、スキル不足得点と負の相関関係であることは AS の定義に沿ったものであると言える。NA 得点は自分志向得点とスキル不足得点と中程度の正の相関、関係距離確保得点と弱い正の相関となった。自分志向が高いほど自分の発言を否定されることを恐れて発言を控える傾向が強く、スキル不足が高いほど、人に何かを伝えることができない傾向が強いことを示している。また関係距離確保が高いほど、相手との関係が密にならないように発言を控える傾向が強いことを示している。つまり、NA 得点が高いものは自身の発言を否定されることを恐れ、コミュニケーションスキルが低いことから、発言を控える傾向が強いことが明らかとなった。これは NA の自分の気持ちや考えを抑え、信念を表現しないという定義に当てはまることから、NA の特徴を捉えていると言える。AG 得点は相手志向得点と中程度の正の相関、規範・状況得点と弱い負の相関がみられた。相手志向が高いほど、相手のことを考えずに言いたいことを言う傾向が強く、規範・

状況が高いほど周囲の状況を考えて発言する傾向が強い。つまり、AG 得点が高い者は相手や周囲の状況を考えずに言いたいことは言うてしまう傾向が高いことが明らかとなった。これは、AG の自分の気持ちや考えを言うことで自身の言動の自由を守るが、相手の言い分や気持ちを無視、軽視するという定義に当てはまることから、AG の特徴を捉えていると言える。

以上から、今回作られたアサーション尺度、並びに下位尺度の妥当性はある程度確認することができたと言える。今後の課題としては、予備調査に比べ項目バランスは改善されたものの、依然としてバランスはいいとは言えず、また項目内容に関してもより多くの状況を加えた尺度を作成することが重要と言える。

IV. 第2研究

1. 目的

第1研究ではアサーション尺度の作成並びに妥当性の検討を行ったが、妥当性に関して量的なものであったため、より多面的な妥当性検討を試みるために質的な妥当性検討を試みることを目的とする。

今回アサーション尺度の質的妥当性を検討するにあたり、PF-Study（成人用）を使用することにした。

PF-Study は「フラストレーションに対する反応を査定するための絵画連想法」とよばれ、適用範囲が広く、日常のストレスに対する反応パターンを明らかにするための制限投影法である。テストの内容は、24 個の漫画風の絵からなっており、それぞれの絵は日常の対人関係の中で経験されるフラストレーション場面が描かれている。そのフラストレーションを引き起こした相手に対する被検者の発言反応パターンからその人物の特徴を明らかにするものである。またテスト場面は大きく 2 つにわけ、一つは人為的・非人為的な障害によって直接自我が阻害されて欲求不満を引き起こしている自我阻害場面、もう一つは誰かほかの者から非難・詰問されて、超自我（良心）が阻害されて欲求不満を招いた超自我阻害場面と言う。24 個の場面に対する反応から個人の特徴を分析する際、GCR（Group Conformity Rating）、9 種の評点因子（E'、I'、M'、E、I、M、e、i、m）、アグレッション型（O-D、E-D、N-P）、アグレッション方向（E-A、I-A、M-A）、超自我因子（E、I、E + I、E - E、I - I、（M - A） + I）、反応転移から判断する。今回、GCR、反応転移を除くスコアを分析対象にするため、それらを除いた他の項目について簡単に述べる。

アグレッションの方向

E-A（他責的反応）：欲求不満の原因を他人とか環境のせいにする反応で、これが高い人は、心の深層ではむしろいつも他人から非難されたり、攻撃されたり不利なことをされたりするのではないかと気にしがちな人で、そのために投射機制という自我の防衛機制をはたら

かせて、反対に相手を非難し敵意を示すということになる。

I-A（自責的反応）：欲求不満の原因を自分の責任に帰す反応で、これが高い人は何かにつけて後悔と罪の意識を抱きやすく、自責傾向の強い人である。防衛機制としては「置き換え」「孤立化」「帳消し」の機制を用いる。

M-A（無責的反応）：「欲求不満の原因は誰にもないんだ。これは不可避の事件だ」と考える反応で、これが高い人は妥協の動機が強く、「自己欺瞞」とか「抑圧」といった防衛機制で自分を守ろうとする人である。別の面から考えれば、対象に対し愛情を感じなくなった場合でも他者を非難せずに、その代りに不可避な許容すべき事件だと強調することによって、人から離れることから自分を守ろうとする。

アグレッションの型

O-D（障害優位反応）：欲求不満場面に対する自我の活動反応の率直な表明をさける逡巡反応である。障害の強調・指摘に関係する。逡巡ないし制止の仕方の特徴は **E'**、**I'**、**M'** のいずれを強調しているかによって決まる。

E-D（自我防衛反応）：欲求不満場面において歪力（**Stress**）を解消するために率直にして根本的な反応である。自我の強調に関係する。

N-P（要求固執反応）：**E-D** の反応がさらに発展して建設的な解決を図るために要求に固執した反応。問題解決に関係する。固執方向の特徴は **e**、**i**、**m** のいずれを強調しているかによって決まる。

評点因子

E'（他責逡巡反応）：欲求不満を引き起こさせた障害の指摘の強調にとどめる反応。「チェ！」「なんだつまらない」といった、欲求不満をきたしたことへの失望や表明もこの反応語に含まれる。

I'（自責逡巡反応）：欲求不満を起こさせた障害の指摘は内にとどめる反応。多くの場合を外に表さず不満を抑えて表明しない。内にこもる形をとる。外から見ると欲求不満の存在の否定と思われるような反応である。従って失望や不満を抱いていることを外に表さないためにかえって障害の存在が自分にとっては有益なものであるといった形の反応語もこれであるし、他の人に欲求不満を引き起こさせ、そのためにたいへん驚き、当惑を示すような反応もこれに入る。

M'（無責逡巡反応）：欲求不満を引き起こさせた障害の指摘は最小限にとどめられ、時には障害の存在を否定するような反応。

E（他責反応）：とがめ、敵意などが環境の中の人や物に直接向けられる反応。

I（自責反応）：とがめや非難が自分自身に向けられ、自責・自己非難の形をとる反応。

M（無責反応）：欲求不満を引き起こしたことに対する非難を全く回避し、ある時にはその場面は不可避なものとなして欲求不満を起こさせた人物を許す反応。

- e (他責固執反応)：欲求不満の解決をはかるために他の人が何らかの行動をしてくれることを強く期待する反応。
- i (自責固執反応)：欲求不満の解決をはかるために自ら努力したり、あるいは、罪悪感から賠償とか罪滅ぼしを申し出たりする反応。
- m (無責固執反応)：時の経過とか、普通に予期される事態や環境が欲求不満の解決をもたらすだろうといった期待が表現される反応。忍耐するとか、規則習慣に従うとかの形をとることが特徴的である。

超自我因子

- E：これは E 反応の変型であって、負わされた責めに対して、自分には責任がないと否認する反応。標準程度の E の出現は、その社会に適応するのに必要な、好ましい程度の攻撃性ないし自己主張性のあることを示している。
- I：これは I 反応の変型であって、一応自分の罰は認めるが、避け得なかった環境に言及して本質的には失敗を認めない反応。多くの場合、言い訳の形をとる。
- E+I：精神発達、社会性の発達と密接な関係をもつ。高すぎる人は、人並み以上に精神が高いとは言えないが、逆にあまりにも低いのは、自我を主張し自分を積極的に守ることができないことを示す。
- E-I：素朴な攻撃傾向を示す指標で、これが高いものは幼稚な攻撃性を備えており、精神発達の未熟性を示している。
- I-I：自責、自己非難の気持ちの強さに関係するもので、著しく高いものは気持ちが過剰であることを示し、反対に低いものは自己反省心に乏しい。
- (M-A) + I：M-A 反応の合計は他を弁護する傾向とも考えられ、それに対し、I は自己を弁護する傾向とみられる。

PF-Study は対人葛藤場面での質的な投影法でありながら、同時に、統計的にも処理することができ、本研究に用いるテストとして最適である。このことについて、秦 (2006) は形式的にも PF の場面はかなり構造化され、TAT のような投影法よりも自由度は少なく、得られた反応は範囲も狭くて内容も簡単なことから、客観的、統計的な基盤に基づいて結果が処理できるという利点ともなっていると述べている。また斎藤ら (2004) も日本語版 PF スタディとしての長年の研究データの蓄積があり、分析に信頼がおけると述べている。

本研究では、アサーション尺度下位尺度得点の高群・低群による PF-Study のスコアリング得点の差異について検討することを目的とする。

2. 方法

(1) 調査日

2008 年 1 月上旬、6、7 月にかけて実施。

(2)調査対象

都内にある私立大学の大学生、計 82 名、うち有効回答 78 名（男子 33 名、女子 45 名）を対象とした。平均年齢 20.82 歳（18 歳～27 歳）、標準偏差 2.143 であった。

(3)調査方法

第 1 研究の本調査において今調査の協力に応じた学生、並びに個別でお願いした学生に集団調査と個別回収方式により実施した。調査時間は約 30 分であった。使用尺度は以下の 2 種類である。

①アサーション尺度（第四段階）35 項目

④ PF-Study（成人用）

3. 結果

PF-Study のスコアリングの信頼性に関して、同じ心理学を専攻し、検査経験のある院生に無作為抽出された PF-Study をスコアリングしてもらい、一致率を確かめた。結果は 75.8%であった。アサーション尺度下位尺度得点を高低群に分類するためアサーション尺度下位尺度得点の標準偏差、得点分布を確認したところ、AS 得点の標準偏差が低く、得点分布に散らばりがあまり見られなかったため、今回は NA・AG 得点のみ扱うこととした（表 11）。

表 11 アサーション尺度、並びに下位尺度、PF-Studyスコアリング得点の平均、標準偏差

アサーション尺度	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
AS	78	13	30	22.359	3.357
NA	78	11	42	23.795	5.805
AG	78	16	44	26.564	6.087
アサーション得点	78	-51	-9	-28.000	8.889
評点因子					
E'	78	-2.1	3.9	0.404	1.634
I'	78	-1.7	6.8	0.937	1.531
M'	78	-2.3	3.7	-0.781	1.348
E	78	-5.6	4.8	-1.779	2.138
I	78	-3.5	5	-0.353	1.569
M	78	-3.1	5.9	1.060	1.906
e	78	-1.8	4.6	0.455	1.539
i	78	-1.5	6.5	0.472	1.440
m	78	-2.4	2.7	-0.618	1.090
アグレッションの方向					
E-A	78	-34	24	-4.756	13.220
I-A	78	-14	29	5.590	9.184
M-A	78	-25	25	-0.346	9.762

アグレッションの型					
O-D	78	-17	35	2.282	9.870
E-D	78	-25	28	-3.974	10.472
N-P	78	-23	27	1.346	9.321
超自我因子					
<u>E</u>	78	-5	8	-1.974	2.896
<u>I</u>	78	-8	12	-2.192	3.640
<u>E</u> + <u>I</u>	78	-12	11	-4.026	4.690
E- <u>E</u>	78	-19	24	-6.692	8.637
I- <u>I</u>	78	-11	23	0.462	7.156
(M-A)+ <u>I</u>	78	-24	25	-2.295	10.767

まず NA・AG 得点を高群・低群に分けるため、パーセンタイル 50%を基準に分類した。そして NA・AG 高低群と PF-Study のスコアリング得点の分散分析を行った（表 12）。PF-Study のスコアリングに関して、9 種の評点因子（E'、I'、M'、E、I、M、e、i、m）とアグレッション型（O-D、E-D、N-P）、アグレッション方向（E-A、I-A、M-A）、超自我因子（E、I、E+I、E-E、I-I、（M-A）+I）を分析対象とした。得点は性差による得点の差を考慮に入れ、男女それぞれの平均値よりどれくらい高いか低いかの±数値を得点として分析を行った。分析の結果、NA 得点は M'に有意な差が見られ、E-D に有意傾向が見られた。つまり低 NA の方が M'反応（無責逡巡反応）をよくし、高 NA の方が E-D 反応（自己防衛反応）をよくしていた。AG 得点は E、E-E、（M-A）+Iに有意な差が見られ、M-A に有意傾向が見られた（表 13）。つまり高 AG の方が E 反応（他罰反応）や E-E 反応（純粹攻撃反応）をよくして、低 AG の方が M-A 反応（無責反応）や（M-A）+I 反応（他者弁護反応）をよくしていた。

表12 NA得点の高低群によるPF-Studyスコアリング得点の差の検定

スコアリング得点	平均値		標準偏差		F値
	高群	低群	高群	低群	
M'	-1.1	-0.493	1.175	1.441	3.993 *
E-D	-1.78	-5.95	9.869	10.724	3.127 †

* p<.05 †p<.10 df=1、74

表13 AG得点の高低群によるPF-Studyスコアリング得点の差の検定

スコアリング得点	平均値		標準偏差		F値
	高群	低群	高群	低群	
E	-1.195	-2.307	2.196	1.963	5.466 *
M-A	-2.41	1.51	9.529	9.709	3.034 †
E- <u>E</u>	-4.38	-8.78	8.933	7.898	5.069 *
(M-A)+ <u>I</u>	-4.95	0.1	10.003	10.988	4.222 *

* p<.05 †p<.10 df=1、74

性差と各 NA・AG 高低群による PF-Study のスコアリング得点の差を見るために、2 要因 2 水準の分散分析を行った（表 14、15、16、17）。

その結果、性差と NA 高低に関して、m において性差の主効果は見られなかったものの、性差×NA の交互作用が見られた[F (1, 74) =5.103、p<.05]。交互作用が見られたため m に対し単純主効果の検定を行った結果、低 NA において単純主効果に有意傾向があり[F(1, 74) =3.165、p<.10]、m スコアは女子の方が男子よりも高かった。また男子において単純主効果に有意傾向があり[F (1, 74) =3.636、p<.10]、m スコアは高 NA の方が低群よりも高かった（図 1）。つまり低 NA では女子の方が、男子では高 NA の方が m 反応（無責固執反応）をよくしていた。

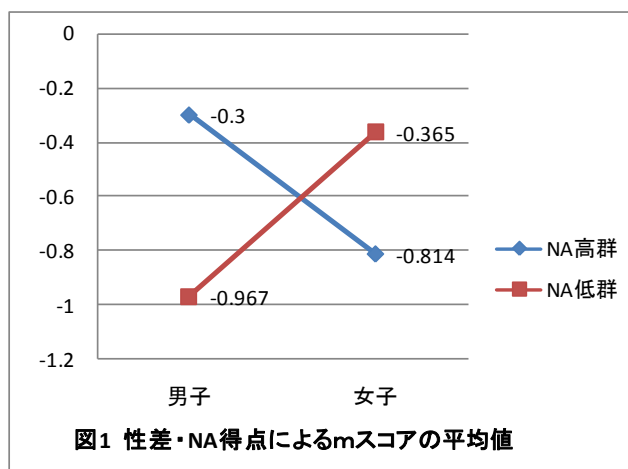


表14 NA高群におけるPF-Studyスコアリング得点の平均、標準偏差

評点因子	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
E'	37	-2.1	3.9	0.478	1.545
I'	37	-1.7	4.4	0.819	1.250
M'	37	-2.3	2.5	-1.100	1.175
E	37	-5.6	4.8	-1.576	2.524
I	37	-3.5	2.5	-0.149	1.495
M	37	-3.1	5.9	1.116	1.924
e	37	-1.8	4.6	0.414	1.503
i	37	-1.4	3.5	0.351	1.315
m	37	-2.4	2.1	-0.605	1.022
アグレッションの方向					
E-A	37	-32	24	-3.973	13.726
I-A	37	-14	23	5.459	8.349
M-A	37	-20	21	-1.324	9.615
アグレッションの型					
O-D	37	-16	18	0.730	8.478
E-D	37	-25	18	-1.784	9.869
N-P	37	-20	18	0.946	8.195

超自我因子					
E	37	-5	4	-1.595	2.783
I	37	-8	12	-2.297	3.733
E+I	37	-12	11	-3.784	4.360
E-E	37	-19	24	-6.486	10.197
I-I	37	-11	12	1.568	6.158
(M-A)+I	37	-20	23	-3.892	10.682

AG 高低に関して、I において性差の主効果が見られ[F (1、74) =4.293、 $p<.05$]、男子の方が女子よりも I スコアが高かった。また性差×AG の交互作用が見られ[F(1,74)=6.913、 $p<.05$]、I に対し単純主効果の検定を行った結果、高 AG において有意な差があり[F (1、74) =10.729、 $p<.01$]、I スコアは男子の方が女子よりも高かった (図 2)。つまり高 AG 高群では男子の方が I 反応 (自罰反応) をよくしていた。

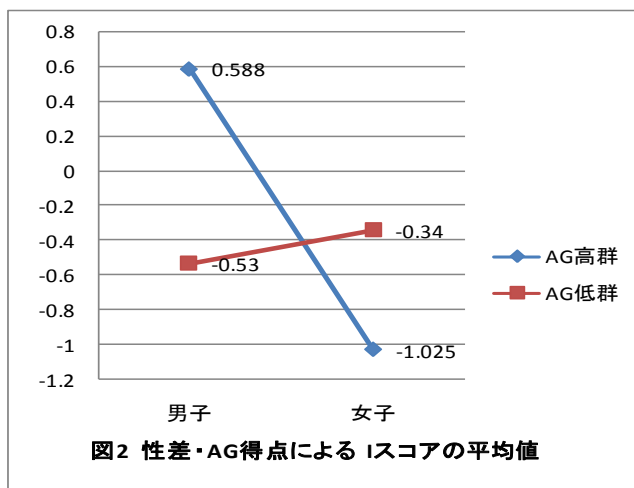


表15 NA低群におけるPF-Studyスコアリング得点の平均、標準偏差

評点因子	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
E'	41	-2.1	3.9	0.337	1.727
I'	41	-1.7	6.8	1.044	1.756
M'	41	-2.3	3.7	-0.493	1.441
E	41	-5.1	2.3	-1.963	1.730
I	41	-3	5	-0.537	1.629
M	41	-2.6	4.9	1.010	1.912
e	41	-1.8	4.1	0.493	1.588
i	41	-1.5	6.5	0.580	1.553
m	41	-2.4	2.7	-0.629	1.160
アグレッションの方向					
E-A	41	-34	22	-5.463	12.875
I-A	41	-12	29	5.707	9.981
M-A	41	-25	25	0.537	9.927

アグレッションの型					
O-D	41	-17	35	3.683	10.891
E-D	41	-24	28	-5.951	10.724
N-P	41	-23	27	1.707	10.320
超自我因子					
E	41	-5	8	-2.317	2.987
I	41	-8	11	-2.098	3.597
E+I	41	-12	9	-4.244	5.014
E-E	41	-17	7	-6.878	7.068
I-I	41	-11	23	-0.537	7.893
(M-A)+I	41	-24	25	-0.854	10.769

I-Iにおいて性差の主効果傾向が見られ[F (1, 74) =3.421、 $p<.10$]、男子の方が女子よりも I-I スコアが高かった。また性差×AG の交互作用が見られ[F(1,74)=10.037、 $p<.01$]、I-I に対し単純主効果の検定を行った結果、高 AG において有意な差があり[F(1,74)=12.224、 $p<.01$]、I-I スコアは男子の方が女子よりも高かった（図 3）。つまり高 AG では男子の方が I-I 反応（自己非難、自己反省）をよくしていた。

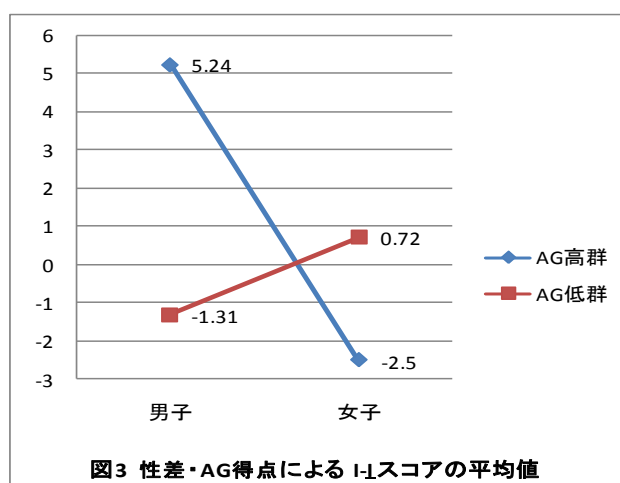


表16 男子におけるPF-Studyスコアリング得点の平均、標準偏差

評点因子	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
E'	33	-2.1	3.9	0.506	1.861
I'	33	-1.7	6.8	0.988	1.828
M'	33	-2.3	3.7	-0.748	1.566
E	33	-5.6	2.4	-2.145	1.935
I	33	-3	5	0.045	1.593
M	33	-1.1	4.9	1.642	1.692
e	33	-1.8	3.2	-0.045	1.438
i	33	-1.5	6.5	0.394	1.616
m	33	-2.4	2.1	-0.664	1.202

アグレッションの方向					
E-A	33	-34	22	-7.485	14.056
I-A	33	-6	29	7.364	9.137
M-A	33	-25	25	0.273	11.178
アグレッションの型					
O-D	33	-17	35	3.091	11.620
E-D	33	-22	28	-2.000	10.311
N-P	33	-23	27	-0.394	10.241
超自我因子					
E	33	-5	8	-1.667	3.425
I	33	-8	12	-2.364	3.516
E+I	33	-12	11	-3.909	5.095
E-E	33	-19	8	-8.455	7.563
I-I	33	-9	23	2.061	7.420
(M-A)+I	33	-24	23	-1.576	12.034

E+Iにおいて性差の主効果は見られなかったものの、性差×AGの交互作用傾向が見られ[F (1, 74) =2.796、p<.10]、E+Iに単純主効果の検定を行った結果、男子において有意傾向が見られ[F (1, 74) =3.073、p<.10]、E+Iスコアは低AGの方が高かった（図4）。つまり男子では低AGの方がE+I反応（自我の主張、自己保守）をしていた。

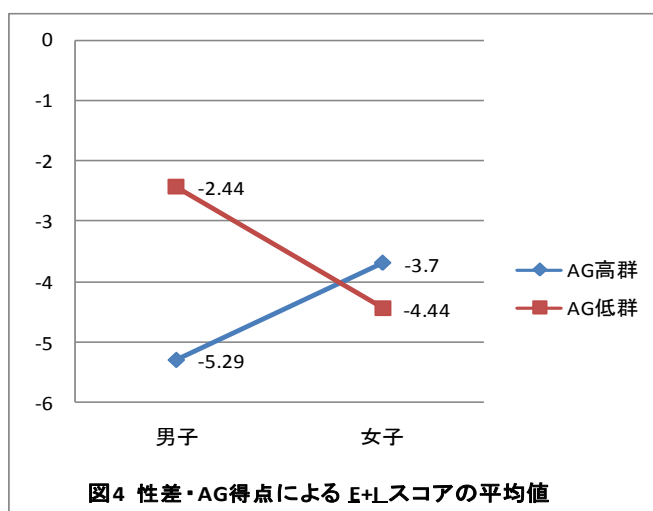


表17 女子におけるPF-Studyスコアリング得点の平均、標準偏差

評点因子	度数	最小値	最大値	平均値	標準偏差
E'	45	-2.1	3.4	0.329	1.463
I'	45	-1.6	4.4	0.900	1.292
M'	45	-2	2.3	-0.804	1.181
E	45	-4.7	4.8	-1.511	2.258
I	45	-3.5	2.5	-0.644	1.502
M	45	-3.1	5.9	0.633	1.959
e	45	-1.4	4.6	0.822	1.521
i	45	-1.4	3.6	0.529	1.312
m	45	-2.4	2.7	-0.584	1.012

アグレッションの方向					
E-A	45	-28	24	-2.756	12.348
I-A	45	-14	23	4.289	9.100
M-A	45	-20	23	-0.800	8.683
アグレッションの型					
O-D	45	-16	18	1.689	8.453
E-D	45	-25	18	-5.422	10.465
N-P	45	-20	18	2.622	8.475
超自我因子					
<u>E</u>	45	-5	4	-2.200	2.455
<u>I</u>	45	-8	11	-2.067	3.762
<u>E+I</u>	45	-12	9	-4.111	4.427
E- <u>E</u>	45	-16	24	-5.400	9.216
I- <u>I</u>	45	-11	16	-0.711	6.801
(M-A)+ <u>I</u>	45	-20	25	-2.822	9.843

4. 考察

第 2 研究の目的はアサーション尺度の質的な妥当性検討を試みることであった。まず、NA・AG 高低における PF-Study のスコアリング得点の差について、NA に関して M'、E-D に差が見られた。M'は欲求不満を最小限に抑える反応であり、高 NA の方が高いと予想されたが、結果は低 NA の方が高かった。また E-D について、高 NA の方が低 NA よりも高かった。この結果について、詳しい考察は全体的考察で述べたい。AG について、E と E-E は高 AG の方が得点が高く、M-A と (M-A)+I は高 AG の方が低かった。E と E-E は他責反応や攻撃性を表すもので、高 AG の方が高いということは、AG の定義と当てはまると言えよう。また M-A と (M-A)+I は無責反応や他者または自己を弁護する反応であり、高 AG の方が低いということは、他者に対する配慮が低いことがいえるため、これも AG の定義と当てはまる。以上から AG に関しては質的な検討においても妥当性を確認することができたと言える。

性差と各 NA・AG の関係について、まず性差×NA に関して m 反応に差が見られた。男子においては低 NA の方が m 反応が低く、低 NA においては男子の方が女子よりも m 反応が低かった。以上から男子と女子では同じ NA でも質的に違いが見られることが示唆された。性差×AG について I 反応、I-I 反応、E+I 反応に差が見られた。I 反応、I-I 反応について、高 AG において男子の方が女子よりも得点が高いことがわかった。また E+I 反応について、男子において高 AG の方が低 AG よりも低いことがわかった。つまり男子は高 AG であるにも関わらず自責反応をしていることが明らかとなった。これは AG の定義とは反する結果となった。男子において AG であることは、そのまま AG の定義通りの解釈は必ずしも当てはまらないことが示唆され、AG における男女の背景要因の違いについての検討が課題であると言えよう。

V. 全体的考察

1. アサーション尺度について

本研究の目的は包括的にアサーションを測定する尺度を作成し、その信頼性、妥当性を確認することであった。本調査の結果、AS 8 項目、NA 1 1 項目、AG 1 6 項目の計 3 5 項目のアサーション尺度が作成された。信頼性係数は.711～.858 と高い信頼性を確認することができた。また妥当性に関して、アサーション尺度得点と AMS 得点に中程度の相関関係を確認することができ、今回作成したアサーション尺度はある程度の妥当性を持った尺度であると言える。そしてアサーション尺度下位尺度得点と AMS 得点との相関よりも高いことから、一次元によるアサーション測定よりも多次元によるアサーション測定の方がよりアサーションを測定することが確認された。これは先行研究との見解とも一致するものとなった。

2. 下位尺度について

(1) AS について

AS はスキル不足と負の相関があった。スキル不足尺度の項目を見ると、「言いたいことをうまく言えないことがある」「伝えたいことを上手に言葉にできないことがある」など非主張的な特徴をもち、言うべきことを適切な表現で伝えることができる AS とは反対の立場にあり、定義に当てはまる。自分志向とも低めながらも負の相関が見られ、自分志向は「拒否されるかもしれないという思いから、発言を控えることがある」「見くびられないために、発言を控える」などで構成されている。これらを踏まえると、AS は言いたいことを伝えるという主張性部分が強く反映されていることが言える。

アサーションに関する先行研究において、高橋（2006）はアサーション尺度の課題について「自己表明」「適切な表現」の2つの側面からの測定が必要とし、それらの側面から測定すれば、対象者が表現できないことそれ自体に悩んでいるのか、それとも表現は一応できていても適切な表現ができないことに悩んでいるのかを明らかにすることができるだろうと述べている。さらに高橋(2006)は、アサーションの規定因に関する研究や、A T 実践の円滑な発展が実現するであろうことも述べている。今回の研究において「自己表明」という点においては確認することができたが、「適切な表現」という部分については証明されていない。また「適切な表現」はスキル不足説を説明できるとも述べており、この点から言えばスキル不足と負の相関にある AS は適切な表現についてもある程度説明できるのではないかと示唆される。しかし、今回使用したスキル不足尺度の項目は「適切な表現」に関する内容のものがあまりないために必ずしもそれに当てはまるとは言えず、この点は今後の課題と言える。

(2) NA について

NAはスキル不足と自分志向で正の相関、相手志向と負の相関があった。スキル不足はNA

の言いたいことを相手にうまく言えないという定義に当てはまり、自分志向は相手からの評価を気にするあまり発言を控えるという、NAの自身の言論の自由を踏みにじるという定義に当てはまる。相手志向に関しても「相手を傷つけてでも言いたいことは言う」など自分の気持ちを抑えるNAとは反対の立場にあり定義と当てはまる。PF-Studyとの関係については低NAの方がM'反応が高くなった。M'は欲求不満を最小限に抑える反応であることから高NAなものほど高いことが予想されたが、逆の結果となった。また欲求不満を抑えるI'反応も同じく同様の結果になることが予想されたが、有意差はなかったものの、低NAの方が高かった。

この結果について、まず日本人の対人関係場面における文化的な振る舞いから考えたい。日本人の対人関係は古くから協調的な関係と言われ、斎藤ら（2006）は自己呈示としての謝罪に関する研究において、「日本人は人間関係を大切にするので、相手からの反発や批難を持たれないよう、何か不都合があったらすぐに謝ると解釈される」（大淵、1999）の発言に対し、日本人の謝罪は、自分の非を認める心からの謝罪の気持ちの表現ではなく、人間関係を良好に保つための対人戦略としての謝罪であり、相手に対する自分の印象を操作するための自己呈示の部分が大きいことになると述べている。それを踏まえると、日本人は対人関係における表現においても波風が立つことを嫌い、敢えて欲求不満を述べないことでその場の收拾をつけようとしていると考えられる。これはアサーションにおける「アサーションしない権利」ともつながると言える。それにより本研究では高NAよりもアサーティブで適応的である低NAの方がM'反応をよくしたのではと推察することができる。今後は「敢えてアサーションをしない」という部分をいかに捉えるかが課題として挙げられる。

またPF-Studyという投影法という観点からも検討する必要がある。それは普段言いたくても言えないという高NAの人が投影法という背景の中で普段は出さないアグレッションの部分が出たために他責反応が増加し、結果としてM'反応が少なくなった可能性がある。園田ら（2002）によれば、行動療法家のWolpe,J.は非主張的な人のアサーション・トレーニングのプロセスで、非主張的な人がアサーティブになろうとすると、時にいきなり攻撃的になることに気づいたとしている。今回のPF-Studyにおいて、NA得点が高い者から3名を取り出し、プロフィールを見たところ、NA得点が42点（AG得点19点）の者と、NA得点33点（AG得点25点）の者の2名にそのような傾向が見られた（表18、19）。前者の者はEやeやE-Aが性別平均よりもかなり高く、M'やMやmやM-Aが性別平均よりもかなり低かった。後者はE'やeやE-Aが性別平均よりもかなり高く、M'やMやmやM-Aが性別平均よりもかなり低かった。トレーニングの過程ではないが、投影という普段では表現できないことが表紙しやすい場面の影響により、仮説と反対の結果になったのかもしれない。そのため今後はインタビューなどを合わせることで、投影による反応と実際の行動による反応について、より重層的に比べる必要があろう。

表18 20歳 女子 AS得点20点 NA得点42点 AG得点19点 アサーション得点-41点

	反応内容	評点
1	スピードを出しすぎじゃないか!?	/E/
3	マナーがない人は困るよね…。	/E/
4	急いでくれてありがとう。気にしないでくれ。	/M/
7	言ってやらなきゃいけない時もあるんだよ。	/E/
8	たまには、みんなで集まりたいんじゃないかな?	M'//
9	それは困ったなあ…私じゃダメなんですか…?	E'//e
11	君が聞きまちがえたんじゃないの?	/E/
12	あの男は、ダレなんだい?よく来る人なんですか?	//e
13	そんな勝手な事言われても困ります。	/E/
14	いつも遅刻してくるから、今日も遅刻でしょう。	/E/
15	そんな事はありませんよ。チームで戦ったんですから。	/M/
16	あなたが避けなかったからじゃないか!?	/E/
18	残念、また来ますね	//m
20	忘れられたんじゃないの?	E'//
21	罰が当たったんじゃないのかしら?いつもろくなコトをしないから。	/E/
24	新しい物を買ってきてください。まだ、読んでないので…。	//e

表19 18歳 女子 AS得点21点 NA得点33点 AG得点25点 アサーション得点-37点

	反応内容	評点
1	ちょっと今度からは気をつけてください	/E/
3	そうですねー。ちょっと見えにくいです。	E'//
4	気をつけてくれないと困ります。	/E/
8	え!?そうなの??	E'//

9	なるべく早くしたいのでなんとかありませんか？	//e
11	急ぎなのでなるべく早くお願いします。	//e
12	困りましたね。その男の人と連絡とれますか。	E'//e
13	ではいつならお逢いできますか？	//e
14	遅刻ですかね。それとも事故にまきこまれたのでしょうか。	/M/
15	しょうがないですよ。次回から頑張りましょう。	/M/m
18	そうですか。それは残念です。	E'//
20	何か事情があるのかもしれないですね。	/M/
21	あなたが言ってるほど悪くいってるつもりはないですよ。	/E/
23	あまりに長くまつようだったら帰りましょう	//e
24	いやいやしょうがないですねー。	/M/

次に高NAの方がE・D反応が高いことについて、他のスコアを見ると高NAはE・Dを構成するE、I、Mで有意差はないものの全てにおいて低NAよりも得点が高かった。それに対し低NAはO・D（M'とI'）やN・P（eとi）が高くなっている。つまり低NAは前者のようなその場の收拾のための反応や、後者のような問題解決を図る反応を高NAよりも全体的に選択していると言える。秦（1993）によれば、住田ら（1964）はアグレッションの型間の関係について「自我―防衛型（E・D）」が一次的反応で、二次的な反応として「障害―優位型」と「要求―固執型」の段階を想定している。住田ら（1964）は欲求不満が認知され、自我の欲求体制の均衡破綻となり、これを調整した自我体制に復元しようとして第一次的直接表現として自我防衛反応（E、I、M）が発生し、さらにこうした欲求不満に対する直接反応表現で満足できぬ時はこれを修正する二つの異なった心的要因が働き‘抑圧’機能による調整反応表現としての障害優位反応（E'、I'、M'）や‘要求固執’機能に基づく不満の解決策（e、i、m）の第二次的表現が現れるとしている。このことから、高NAは第二次的表現に移ろうにも発言による否定の恐れや適切な表現を持たないため、結果的に第一次の反応にとどまったのではないかと考えられる。以上を踏まえ、「適切な表現」などについての課題はあるものの、ある程度の妥当性は備えたものであると言える。

(3) AG について

AG は相手志向と正の相関、自分志向、規範状況、スキル不足と負の相関があった。相手志向は自身の気持ちを優先し相手のことを軽視または無視する AG の定義に当てはまる。また発言を控える自分志向や言いたいことをうまくいえないスキル不足は AG とは反対の立場にあり定義と当てはまる。規範状況は「場を乱すような発言は控える」などであり、他者に対する配慮は二の次で自身の言論の自由のみ行使する AG の定義に当てはまる。

PF-Study との関係については高 AG の方が E 反応と E-E 反応が高く、M-A 反応と (M-A) +I 反応が低かった。E 反応や E-E 反応は攻撃性を示す反応であり、AG の定義に当てはまる結果となった。また M-A 反応や (M-A) +I 反応は他者や自己を弁護する反応であり、自分の気持ちを優先し他者に対する配慮に欠ける反応である AG の定義と当てはまる。以上から、AG は妥当性においても十分に耐えうるものと言える。

3. 各項目について

アサーション尺度下位項目の項目内容並びに項目バランスについて、予備調査に比べて改善された。しかし AS の項目数と AG の項目数では 2 倍の差があり、更なる項目数のバランスを改善する必要がある。また項目内容に関して、AG 項目文末に「怒る」や「怒鳴る」である質問項目が見られ、それらが一般的に負のイメージを容易に喚起しやすいなど、項目選択に影響を与えた可能性を考慮しなければならない。項目場面についても、社会的場面や家族場面などより多くの場面からなる尺度を作成することで、より包括的なアサーションを測定できるよう改善が必要とされる。

4. 性差との関係について

NA×男女において m 反応に差があった。低 NA 男子は高 NA 男子よりも、また低 NA 女子よりも m 反応が低かった。m 反応は時の経過や環境が解決してくれるという期待を表現した多少の忍耐が必要な反応であるが、低 NA 男子はそれが最も低い結果ということは、女性が低 NA であることよりも不適応である可能性が示唆された。本来低 NA であることは非主張的でないということであり、適応的であると言える。今回の結果から、男女の質的な違いについても見ていく必要があると考えられる。先行研究においても、主張性の内容と性差についての研究で児童期、思春期、成人期において男女に主張性の違いを見出しており（佐藤、2005；古市、1993・1995；柴橋、2004）、本研究でも同様の示唆が得られた。

AG×男女において I 反応と I-I 反応と E+I 反応に差があった。I 反応と I-I 反応について、高 NA 男子の方が高 NA 女子よりも I 反応と I-I 反応が高かった。つまり男子は AG 表現をしているものの、PF-Study においては自責反応や自己反省心が高いことが明らかとなった。AG は他者配慮に欠ける表現である。それを踏まえれば当然低いことが予想されるがそうはならなかった。先の m 反応でも然り、男子は適応的とされる表現（低 NA）で不適応的（低

m 反応)であったり、不適応的(高 AG)であるとされる表現で全く逆の反応(I、I-I 反応)をしている。そこで E+I 反応を見てみると、女子については高低に差はないものの、男子で高 AG の方が反応が少ない。E+I 反応は精神発達や社会性の発達と密接な関係を持つとされ、低いと自我を主張し自分を積極的に守ることができないことを示している。以上から男子は女子に比べ精神性や社会性が未発達な傾向があると考えられ、適切な表現の未熟さが故に AG な表現になったのではないかと考えられる。また低 NA でありながら不適応である可能性については、今後の課題であるとともに、NA の妥当性という点や社会的望ましさの可能性という点からも検討する必要がある。

5. 本論文の結論

本研究では、アサーション尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討を量的・質的に検討することであった。アサーション尺度に関して、多次元の方がアサーションを測定することを確認できた。下位尺度について、妥当性については「適切な表現」と「アサーションしない権利」という点に課題はあるものの、ある程度妥当性を備えたものと言えよう。質的な検討について、AG については質的にも妥当性を確認することができた。NA についても、NA の背景要因についていくつかの可能性が示唆されたことは意義があると言える。また男女での質的な違いが見られたことについて、今後男女の背景要因を明らかにすることで、より個人の特性に見合った AT を実施するための知見が得られるだろう。

6. 今後の課題

第 1 に、「適切な表現」「アサーションしない権利」などを踏まえたアサーション尺度の作成が課題と言える。そのためには本音と建前という側面に、さらに建前をどの程度、個人が受容しているのかという視点からのアプローチが必要となろう。つまり、否定的に受け止めた感情(本音)を次に外に表現(建前)する際に、受容して「表現しない」というスタイルをとるのであれば「アサーションしない権利」の行使となるが、受容しないままの NA であれば、これは「適切な表現」ができないことによる可能性が出てくる。外見的には同じ NA に見えたとしても、それをどのように個人が受け止めているのかが異なれば、その性質も異なってくるのである。その点に関して渡部(2006)は認知的側面、情緒的側面、行動的側面の 3 側面からなる尺度作成を提案しており、それは各々建前(行動的側面)、本音(情緒的側面)、受容(認知的側面)に当てはまるとしている。以上から今後の課題として、この 3 側面を導入した尺度の作成なども必要となるであろう。

第 2 に、項目数のバランスや多場面からなる項目のいっそうの充実、AG 項目における語尾(「～怒る」「～怒鳴る」など)の改善が必要であろう。また各因子の項目数にバラつきがないよう均一にすると共に項目内容を充実させることによって、個人がどの対象が苦手なのか、どの場面だとうまく表現できないのかを明らかにしやすくなると思われる。そしてそれは、AT をする際の重要な視点となると期待される。

第3に、男女の違いに関する検討が挙げられる。先行研究で述べられているように本研究でも男女の違いが明らかとなった。これらについて今後さらに検討をし、男女による背景要因の違いを明らかにすることによって、第2と同様に個人に見合ったATを実施する際の知見となろう。

第4に、PF-Studyのスコアリングにおける信頼性の考慮を挙げたい。今回のスコアリングの一致率は約75%であった。この数字は決して高いとは言えるものではなく、信頼性に関して課題と言えよう。今後は、複数の評定者によるスコアリングと、不一致の際の精緻な検討を経た決定を行うことによって、信頼性の更なる向上がはかれることが必要と思われる。

参考・引用文献

- 濱口佳和 1994 児童用主張性尺度の構成 教育心理学研究 42、4、463-470
- 半田将之 2007 児童用アサーション尺度作成の試み 創価大学大学院紀要 29、239-255
- 畑中美穂 2003 会話場面における発言の抑制が精神的健康に及ぼす影響 心理学研究 74、2、95-103
- 平木典子・沢崎達夫・土沼雅子 2002 カウンセラーのためのアサーション 金子書房
- 平木典子 1989 アサーションとは？さわやかな自己表現のために 青年心理 金子書房、75、82-86
- 平木典子 1993 アサーショントレーニング ―さわやかに自己表現>のためにー 日本・精神技術研究所
- 古市祐一 1993 主張性検査開発の試み こころの健康、8、87-93
- 古市祐一 1995 児童用主張性検査開発 こころの健康、10、69-76
- 伊藤弥生 1998 アサーティブ・マインド・スケール (Assertive Mind Scale) 作成の試み 人間性心理学研究 16、2、212-219
- 伊藤弥生 2001 日本におけるアサーション像の探索的研究 アサーション・トレーニング参加者の個別面接を土台に 心理臨床学研究 19、4、410-420
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・田中克江・田村隆一 1989 精神的健康に関する研究―アサーション尺度作成を中心として― 健康科学 11、121-128
- 村山正治・山田裕章・峰松修・冷川昭子・田中克江・田村隆一 1991 精神的健康に関する研究―アサーション尺度の改訂と分析― 健康科学 13、97-103
- Saul.Rosenzweig 秦一士 2006 攻撃行動とP-Fスタディ 北大路書房
- 斎藤勇・荻野七重 2004 自己呈示としての謝罪言葉の実証的アプローチ 立正大学心理学部研究紀要、2、17-33
- 佐藤淑子 2005 大学生の自己主張と自己の発達 発達研究 19、65-79
- 沢崎達夫 2006 青年期女子におけるアサーションと攻撃性および自己受容との関係 目白大学心理学研究 2、1-12

- 柴橋裕子 2004 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究 52、12-23
- 園田雅代 2002 概説アサーション・トレーニング 創価大学教育学部論集、52、79-90
- 園田雅代 2008 日本の男性の心理学、269-274
- 園田雅代・中釜洋子・沢崎俊之 2002 教師のためのアサーション 金子書房 1-10
- 菅沼憲治・牧田光代 2004 エクササイズと事例で学ぶ実践セルフ・アサーション・トレーニング 東京図書
- 高橋均 2006 アサーション尺度の現状と課題 心理臨床学研究 24、5、606-614
- 玉瀬耕治・越智敏洋・才能千景・石川昌代 2001 青年用アサーション尺度の作成と信頼性及び妥当性の検討 奈良教育大学紀要 50、1、221-231
- 渡部麻美 2006 主張性尺度研究における測定概念の問題—4 要件の視点から— 教育心理学研究 54、420-433
- 山本真理子・松井豊・山成由紀子 1982 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究 30(1)64-68
- 用松敏子・坂中正義 2004 日本におけるアサーション研究に関する展望 福岡教育大学紀要 53、4、219-226